



episode.07

坊津の今岳ポンカン

話し手 入来万之助の孫

兼業農家 **入来 昭仁**さん (昭和33年8月12日生)

会社員 **入来 幸人**さん (昭和35年9月8日生)

聞き手 希望が丘学園 鳳凰高等学校 2年

越牟田 花美 中村 真緒



「現在の栽培に至るまで」

入来万之助は私達の祖父なんですけど、早くに亡くなったもんだから、私達は祖父に会ったことはないですね。でも資料が残っているから、その中から話せる感じです。

昔からこの辺は崖が多くて、広い平地や畑がなくて産業がなかったみたいです。稲作を段々畑で細々と作るくらいで。万之助は、農民の生活を救いたいと、この地に適した農産物を探してみたいです。いろんな資料を集めたり、垂水の試験場に行ったりして、今岳地区がポンカンに適している地域だと確信したんでしょうね。昭和3年に万之助が36歳の時にポンカン栽培に着手します。

ポンカンは、高温で雨が多くて、平均20度ぐらいの地域が適しているんですけど、坊津自体が、年間平均気温は18度ぐらい。そして、雨は少ない所だと思います。そんな中で、周りの反対を押し切ってポンカン作りを始めたそうです。海岸が近いので、初めは暴風雨や潮風の塩害で枯れたみたいです。特に幼木だと弱かったと思います。ポンカンが実ったのが6年後の昭和9年ですね。おそらく、集落の方の力も借りながらだと思えます。

最初に植えた種類が、小ぶりでちょっと寒い所でも育つ“低梢系”。翌年に、少し縦長で暖かい所に適した“高梢系”を植えたという資料があります。

今は“低梢系”は一本だけで、あとは全部“高梢系”だなぁ。この辺りは、“高梢系”が向いているんでしょうね。園自体の日当たりは全部南向きだし、海の反射とかもあるから。あとこの辺は、無霜地帯だからね。霜が降りないのはこの辺では坊津だけですもん。



「万之助の想いを継いだ親父と私」

昭和19年、万之助が52歳で亡くなって、私の親父が14歳だったみたいです。親父もポンカンに対する熱量はすごかったですよ。その道を極めたんじゃないかな。知識も技術も。ポンカンは年によって、なる年ならない年の「表裏」があるんです。うちの園だけは毎年、同じように実もなって、味も出していましたから。だから剪定の技術なのよね。親父は栽培の勉強も、まあ好きでしたね。畑の中には親父が植えた種類のわからない柑橘類の木や、一本の木に4種類くらいなるものもありますよ。

平成14年には親父と私で垂水の農業試験場に行って、育て方とかいろいろ聞いて、薩州っていう品種を接木で作ったのが園にあります。薩州は申木野の人が作ったみたいで、甘味、糖度も高いですね。それから私が、10年ちょっと前にポンカンだけでなく、タンカンも植えています。

今、本数は高梢系が41本、薩州が30本くらい、タンカンが110本ぐらいですかね。年間で合わせて、3〜4トン弱を収穫してますね。

「一族で守るポンカン栽培」

親父から「稲作はやめてもいいけど、ポンカンだけは絶やすな、止めるな」というふうに言われてきました。それはもうしょっちゅう聞いてました。

私の跡は、私の娘が継ぐと思いますね。今、手伝いで剪定も袋掛けも肥料かけるのも全部してますよ。令和元年に親父が亡くなっているんですけど、最後に看取ったのが娘なんです。その時に「ポンカン頼む」と言われたみたいです。娘も絶やしちゃういけないと思ったんじゃないかな。

